
バカと百合な妹と召喚獣

黒炉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと百合な妹と召喚獣

【Nコード】

N6361Y

【作者名】

黒炉

【あらすじ】

この小説は『バカとテストと召喚獣』双子の妹は瑞希好き！？
『』を一から書き直したものです。吉井明久の双子の妹は兄の想い人、姫路瑞希が大好きな百合娘！？彼女が乱入したバカテスト世界はどう動いていくのか！？（といっても原作沿い……）他作品と同時に更新となるので、あまり更新ペースは速くありませんが、よろしく願います！

第0話（前書き）

あらずじにも書きましたが、この小説は『バカとテストと召喚獣

』双子の妹は瑞希好き！？』を一から書き直したものです。

双子の妹は瑞希好き！？をお気に入り登録、評価してくださった皆様、そして読んでくださった読者の皆様に楽しんでいただけるものを書いていくつもりです。

プロローグ
それでは第0話です。

よろしく願います。

第0話

『体調が悪くて途中退席するだけで無得点だなんてあんまりじゃないですか!!』

少年の声が振り分け試験会場に響いた。

少年の名は『吉井明久』。来年度で文月学園の第2学年に進級する生徒である。

振り分け試験とは、世界でも珍しい『試験召喚システム』を取り入れた進学校『文月学園』のクラス分け試験である。

文月学園は第2、3学年はテストの点数によってAからFの6つのクラスに振り分けられる。

点数が高ければAクラスに、点数が低ければFクラスに振り分けられるというわけだ。

「体調管理も試験のうちだ。吉井、お前は早く席につけ。姫路、保健室に行くか？ただし試験中の途中退席は「無得点」扱いになるがそれでいいか？」

教師は明久を無視し、明久が抱きかかえている少女——姫路瑞希に聞く。

「……退席、します……」

「そうか。なら誰か先生を——」

「……もういいです。僕が瑞希ちゃんを保健室まで連れて行きます」

監督の教師が瑞希を連れていくために他の先生を呼ばうとすると、明久が静かに言った。

「…吉井、分かってないようだから言うが、試験中の途中退席は無
得点扱いで――」

「関係ないです」

一言、それだけ言うと、明久は瑞希をかついで教室を出ていく。

監督教師はそれを黙って見ていたが、すぐに咳払いをして周囲の生徒にs注意を促す。

そんな中、ただ一人ペンを止め、表情を曇りに曇らせている少女がいた。

少女は明久と瑞希が出て行ったドアを見つめる。いや、もしかしたらその先にいるであろう二人を見ているのかもしれない。

「……………先生」

ガタツと少女は席を立ち、監督教師を呼ぶ。

「なんだ吉井。席に着け」

「気分が悪いので保健室に行ってきます」

「気分が悪いようには見えないぞ」

「いいえ。はつきり言っただけです」

指摘された通り、体調が悪いわけではない。

悪いのは体調ではなく、気分そのものなのだが。

「…お前も兄同様分かっていないようだが、試験中の途中退席は――」

「それくらいわかってます」

口では敬語でも、少女の教師を睨む目には敬意など一切含まれていない。

むしろ軽蔑さえ含まれているだろう。

「先生の存在のせいで気分が悪くなったので途中退席させてもらいます。次アキ兄や瑞希の前で喋ったらぶち殺しますから覚悟してください」

ありったけの罵倒をぶつけると、スタスタと教室のドアに向かって歩いていく。

当然教師がそれを見逃すはずがなく、少女を引き留めようとするが、

「ま、待て！戻るんだ！お前なら間違いなくAクラス確定だろう！」

「自分の兄や友達をほったらかしにして使うシステムデスクに何の価値があるんですか。バカバカしい寝言をほざくのもいい加減にしてください」

少女は自分と明久、瑞希の荷物をてきぱきとまとめると、それを持って教室から出て行った。

「……ふう、なんかまたやっちゃったなあ……」

教室から出ると同時に少女はため息をつき、すぐに保健室へ向かって走り出す。

第0話（後書き）

できるだけ早く、次を仕上げるつもりです。

オリ主人公のプロフィール紹介&オリジナル設定&原作キャラの設定変更点(前

とりあえず連投です。

まあ他の奴もこの土日中に仕上げます。

え？勉強しろ？

ハテ？ナンノコトヤラ？

オリ主人公のプロフィール紹介&オリジナル設定&原作キャラの設定変更点

オリ主人公

名前：吉井香奈^{よしいかな}

性別：女

身長：144cm

体重：【国家機密】

特技：歌、早読み、

趣味：読書、映画鑑賞

好きなもの：瑞希、明久、瑞希及び明久に優しい人、父親、福原先生、美春、玉野、イチゴ、甘いもの、動物（主に猫&ウサギ）

嫌いな物 瑞希及び明久をバカにする人、FFF団、苦いもの、牛乳、玲

得意科目　現国、古典、日本史、世界史、音楽、

苦手科目：物理、数学、保健体育

容姿：明久と同じ茶色がかった髪で、三つ編み。身長が低いが出るべきところは出ている。文月学園公式ロリ巨乳。一部にファンクラスがいるほど。

性格：純粹。頭の回転も速く、雄二ほどではないにしても、策略家として非常に有望。キレたときは人が変わったように攻撃的な性格になり、文系科目の圧倒的な攻撃力で相手をねじ伏せる。ただし、強いのはあくまでも試召戦争の時だけの話。本人の格闘能力は極めて低く、喧嘩をしたこともない。攻撃的になるのも性格だけで、単純な腕力が必要な場面ではいつも弱気になってしまう。

身体能力：ある程度の体力はあるが、それでも瑞希より少し上くらいのレベル。

明久や雄二と違い、基本的な戦闘能力は皆無なので、あるカプセルを持ち歩いている。

ターゲット
目標の口の中に放り込むと溶ける。外側の容器はデンプン製（唾液で溶ける）。

成績：古典、現国は教師クラス、600前後。日本史と世界史は400点前後で、物理、数学、保健体育は120点前後。それ以外の教科は200点前後。総合科目は3000点強。

素行：成績面からも優等生なのは一目瞭然……なのだが、明久や雄二、秀吉や康太といったバカメンバーといつも一緒にいる。頭の回転が速い割に天然……というか、バカな行動が目立ち、上位成績者でありながら鉄人に目をつけられているという珍しい存在。

基本的に体力がないので、鉄人から逃げるときは明久or秀吉にお姫様だっこされている。

召喚獣

装備は1m強くらいの長さの矛と蒼いロープ。

先が3つにわかれている、あのポセイドンさんが持つてるやつ。

ローブには特殊効果があり、“あらゆる属性攻撃を受け付けない”。通常の武器攻撃や無属性の腕輪の攻撃には何の効力もないが、属性を持つ攻撃なら点数を問わず防御、無効化してしまう。

特別な効力を持つ装備品、“天界の七神器”の一つである、『バスクのローブ』

腕輪の能力は“津波”。

200点消費で大きな津波を起こし、敵味方問わず敵を洗い流す。一対多で真価を発揮する能力。

オリジナル設定

【属性攻撃】

腕輪の能力による特殊攻撃及び“天界の七神器”による属性を持つ攻撃のこと。

炎、水、風、雷、大地、光、闇の七つの属性と、それと、最上位属性である灼熱属性、神光属性、聖邪属性を足した十種類がある。

最上位属性はそれぞれ、扱える人間が一人ずつしかない。

例

香奈の“津波” ↓ 水属性

瑞希の“熱戦” ↓ 炎属性

愛子の“帯電”↓雷属性

【天界の七神器】

七つある基本属性の頂点。

七体の神の力を装備に封じ込めたもので、特別な才能を有する人間にのみ与えられる。細かい判断基準は不明。

七体の神とは、炎神ゾシヨネル、海神バスク、雷神トール、風神ハーネラ、大地神バーサ、創世神ガリング、創世神ウンディガの七体を指す。

それぞれが属性をつかさどる装備になっている。

炎神ゾシヨネル↓ゾシヨネルの仮面／所有者：不明／効力不明

海神バスク↓バスクのローブ／所有者：吉井香奈／属性攻撃を無効化

雷神トール↓トールのミヨルニル／所有者：不明／効力不明

風神ハーネラ↓ハーネラの四風神／所有者坂本雄二／ノトス、エウロス、ボレアス、ゼピュロスの四風神を召喚する能力。操作はオート、マニュアルを選択できる。

大地神バーサ↓バーサの果実／所有者：不明／効力不明

創世神ガリンガ↓はじまりの光／所有者：不明／効力不明

創世神ウンディガ↓はじまりの闇／所有者：不明／効力不明

【最上位属性】

最上位属性とは、基本属性の延長線上に位置する属性で、灼熱属性、神光属性、聖邪属性の三種。

それぞれをバハムート、セラフィム、シャヘルが司っており、灼熱属性がバハムート、神光属性がセラフィム、聖邪属性がシャヘルとなっている。

原作キャラの設定変更点

【吉井明久】

現国、古典がCクラスレベル。

瑞希の呼び方が『姫路さん』から『瑞希ちゃん』になっている。

【姫路瑞希】

明久のことを、最初から『明久君』と呼んでいる。

【島田美波】

香奈の影響で暴力が少し治まっている。

【坂本雄二】

メリケンサック装備のほかに、天界の七神器『ハーネラの四風神』を所有する。

明久と瑞希、教師以外で、香奈が天界の七神器所有者だと知る人物は雄二のみ。

【木下秀吉】

基本的に原作と一緒。

香奈にたいして気があるような……？

【土屋康太】

特になし。

オリ主人公のプロフィール紹介&オリジナル設定&原作キャラの設定変更点(後

厨二もいい加減にしろとか言わないで……？

第1問（前書き）

唐笠さん感想ありがとうございました！

第1問

バカテスト 化学

問 以下の問に答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジェラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

吉井香奈の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点』

合金の例……未来合金（↑すごく綺麗）』

教師のコメント

変なところでお兄さんの影響を受けないように。

SIDE 明久

チュンチュンチュン……

小鳥のさえずりが聞こえる。なんかまさに朝って感じだ。
さて……

「香奈、なんでエプロン姿で僕のベッドにいるのかな？」

「ふえ……？あ、アキ兄おはようです」

「おかしいでしょ！？その状態でおはようはおかしいからね！？」

僕の部屋にいただけでもおかしいのになんでエプロン姿！？
僕が寝てる間にいったい何が！？

「ふあ……、朝ごはんができたからアキ兄を起こしに来たんですよ？」

「え？そ、それはありがと……じゃない！それで寝てるのはおかし

いからね!？」

「そーですね!」

「違う!い〇とものノリで返して欲しいんじゃないんだ!」

うう……気遣いはうれしいんだけど、ちょっとぬけちゃってるんだ
よなあ、香奈は。

まあそこが可愛いんだけど!!(↑シスコン)

「あ、アキ兄……」

「ん?どうかしたの?」

「い、今……何時ですか……?」

「へ?」

何時ってそりゃあ……

時計を確認する。

「……………おーまいがあ」

現在時刻、8時30分。

吉井兄妹、完全遅刻。

SIDE 香奈

……というわけで、私たちは文月学園へと続く道を全力ダッシュしているのです。

「あ、アキ兄……」

「何!？」

「大丈夫ですか……?」

アキ兄が私をおぶりながら。

「大丈夫も何も、こうするしかないでしょ? 香奈は体力ないんだから!」

「うう……面目ないです……」

そりゃ確かに全然運動できないし、力もないですけれどお……

「遅いぞ吉井兄妹……お前らは兄妹なんだよな？」

「あ、おはようございます鉄……西村先生」

「おはようです、アイアンマン」

どうやら学校の校門に着いたようです。

そこには肌の黒い先生が仁王立ちしてました。

「吉井兄、お前今『鉄人』って言おうとしなかったか？それから吉井妹は英語で言えはいってもんじゃないぞ」

「ごめんなさい西村先生」

「ごめんなさい金を失った人先生」

「違う！漢字をばらせと言ったんじゃない！」

あれ？えーと、じゃあどう呼べばいいんでしょう？

というか西村先生の本名ってなんでしたっけ？

「香奈、それが先生の本名だから」

「ふえ？西村ってあだ名じゃないんですか？」

「どんなあだ名だ……まあいい、ほら、受け取れ」

先生が私とアキ兄に同じ封筒を渡してきます。

これって、振り分け試験の結果ですよ？

「どうしてこんな面倒なやり方でクラスを発表してるんですか？」

アキ兄が先生に質問します。

そりゃあ決まってますよアキ兄……

「クラスに誰が居るのか分かったら、“戦争”で奇襲を仕掛けたりできなくなっちゃうじゃないですか」

「あ、なるほど」

「全く違うと思うぞ」

え？違うんですか？

「まあ文月学園（こい）は世界的にも有名な試験召喚システムを取り入れるからな、これもその一環ってわけだ」

なるほどー、そういうわけですか。

あ。Fクラスですね。当然ですけど。

「しかし、吉井兄。お前がしたことは、間違ってたなかったと先生は思うぞ」

「え？あ、ありがとうございます」

「あの事は俺たち教師の間でも意見が分かれてな。ほとんどの先生がお前と姫路に再試験のチャンスを与えるべきだと主張したんだが、学園長がどうしても首を縦に振らなかったんだ」

あ、それは仕方ないですね。あの学園長（ババア）。そーゆーところは妙にお堅いですから。

「ちよ、ちよっと待ってくださいよ。香奈だつて……」

「アキ兄、私は自分の意思で途中退席したんですよ？それも嘘までついて」

あれは私の独断ですから、再試験がなくても自業自得ですしね。

「そうだ、吉井妹。気持ちはわかるが教師への暴言はこれっきりしろ。次は庇いきれんぞ」

「あれ、庇ってくださいっただんですか？ありがとうございます。でも

あんな奴を教師と呼ぶのはどうかと思いますよ？屑ですし」

だって超ムカつくんですもん。

「……それをやめろと言ってるんだがなあ……。まあいい、もう教室へ行け」

「はい」

アキ兄と一緒にFクラスの教室へ向かいます。

ああ……愛しの瑞希ちゃんに早く会いたい……

第2問（前書き）

いいですともさん感想ありがとうございました！

第2問

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法にも筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

吉井香奈の答え

『(2)瑞希ちゃんの消失』

教師のコメント

気を付けてください姫路さん。変態が貴女を狙っています。

香奈SIDE

「ほわー……。これがAクラスですか……」

「凄いね…あのディスプレイ、いくくらいするんだろ？」

それ以外にも、個人エアコンに冷蔵庫、ノートパソコンにリクライニングシート……あのリクライニングシートふかふかだなあ……あれで瑞希ちゃんとあんなことやそんなことや××××を××××したり……（じゅる）

「香奈、よだれよだれ」

「ハッ！？妄想が表に！？……失礼しました、アキ兄」

こういう妄想を繰り広げると雄二とかから「自重しろ」って怒られるんですね。

いいじゃないですか！思想言論の自由ですよ！

「香奈、そろそろ行こうか？」

「あ、そうですね。またアイアンマン先生に見つかったら面倒です

し」

Aクラス前の廊下を去ろうとしたときにチラッと日本人形みたいな少女が目に入りました。

「あ、翔子ちゃんです」

「え？霧島さん？あの女の子が好きって噂の？」

「へ？何言ってるんですか？」

「え？」

あれ？もしかしてアキ兄って翔子ちゃんが好きな人知らないですか？
去年は大変でしたよー。事あるごとに惚気話されるんですから……

「とにかく、そーゆーことは人が首を突っ込んでいい話じゃないんですよ。さっさと行きましょー！」

「え？あ、う、うん」

アキ兄の手をとり、てくてくとFクラスの教室のある旧校舎へと向かいます。

「さて、Fクラスの教室はどこかな？」

「アキ兄、気持ちはわかりますけど、現実逃避はよくないですよ」

これって教室てか廃屋ですよ？

アキ兄の気持ちもわかります。

「ま、そんなの気にしてもしょうがないですよ。さっさと入りましよう」

ガラガラと音を立てて扉を開けます。

この扉建てつけが悪いですね。直してもらった方が……

「早く座れこの蛆虫や」……香奈！？」

「ほお……雄二、その蛆虫って単語は私に向けたものですか？それともアキ兄ですか？」

「す、すまん！てつきり明久かと……は！？」

「いい度胸です雄二。私は正直な人は嫌いじゃありません」

そっと取りだしたのは小さな瓶。

「私は雄二やアキ兄と違って戦闘能力は一切ないですから……こういうので肅清しますね」

「ま、待て！それはいくらなんでも危険すぎるるるるるるる！」

小さな瓶の中身……小さなカプセルを雄二の口の中に放り込みます。別にどこぞの平成のホームズみたいにちっちゃくなったりするAPTXなんかじゃないですから。

「あががががが——くたっ」

「雄——！！？」

私のカプセルを飲んだ雄二はその場に沈みました。

てへ
やっ
ちやっ
た

第3問 (前書き)

いいですともさん感想ありがとうございました！

第3問

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly』

姫路瑞希との答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

『 ○ , ▼ # ♪ ✱ % \$ ~ ~ ~ 』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

吉井香奈の答え

『おばあちゃんとおじいちゃん、天国でも元気にしてるかな……』

教師のコメント

今度お線香をあげさせてください。

明久SIDE

「ぐ……あ、明久……？」

「気がついた？雄二」

香奈の謎の物体Xを飲んだ雄二。

そのまま永眠していればよかったものを……

「くそ……、久々だったから耐性がなかったぞ……」

「あ。雄二起きちゃったんですか？そのまま永眠してればいいものを」

思いつき顔をしかめながら言い放つ香奈。

同じことを思っていたとはさすが兄妹だ。

「や、やめてくれ！お前が言つと本当にそうなりそうだ！」

「え？何を今更？」

うん。やっぱり香奈に逆らうのはよくないね。

「すみません。続けてもいいですか？」

「あ。はい。すみません」

先生から注意され、香奈が返す。
すると雄二が口を出してくる。

「そういえば、今どうなってる?」

「えつとね。先生が来て、あまりの設備と対応の酷さに打ちひしがれていたとこ……」

「ああ……」

雄二と一緒に肩を落とす。

腐った畳、蜘蛛の巣の張った天井、脚の折れたちゃぶ台……
酷すぎるよ本当に!?

しかも設備の不備を訴えても、『我慢してください』か『自分で何とかしてください』しか返ってこない……

拳句の果てには『これがFクラスです』……

「雄二雄二、このクラスの担任、福原先生なんですよ?」

「あ、ああ……それがどうs……お前、福原先生大好きだったな」

「はい。尊敬してます! いろんなこと知っててすごいんですよ!」

と、香奈の好きな先生ってことはほつといて、僕らの先生は福原慎先生。

幸の薄そうな初老の先生だ。

「では、木下君から自己紹介をしてください」

先生に促されて、立ち上がる美少j……男子。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。よろしく頼むぞい」

うーむむ、やはりいつ見ても美少女にしか見えない。
爺言葉の美少女も新ジャンルなのか……

「一応言っておくのだが、ワシは男じゃぞ？」

『『『『『バカなああああ！？』『』『』』』』』

Fクラス全員の魂のシャウト。まあ気持ちは分からないでもないんだけど……僕の隣で香奈がビクビク震えてるんだよ……！！

「お、落ち着け明久！」

「エ？ユウジ、ナンカユツタ？」

「落ち着けシスコン野郎！」

フツ……、まあここは雄二に免じて許しておいてやろうじゃないか
バカ共……！！

「……………土屋康太」

「あ、次は康太です」

「相変わらず口数少ないなあ……………」

あまりにも口数が少なすぎてどこから突っ込めばいいか分からない
……………

「……………です。です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど読み書き
が苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。
趣味は……………」

お。この声は女子だね。

男子が多いなとか思ったけど、女子もちゃんといたんだ。
趣味って料理とか読書とかかな？

「吉井明久を殴る事です」

誰！？そんなピンポイントかつ恐ろしい趣味を持つ奴は！？

「はろはろ」 吉井、今年もよろしくね」

「あ、あう……島田さん……」

うーん、島田さんには去年から散々な目にあわされたけど、どうして彼女は今年もよろしくできると思っただろうか？

「美波、ふざけたこと言っていると、眉間をぶち抜きますよ？」

「おわっ！？黒香奈さん！？」

香奈がダークモードに入った！？

「じよ、冗談よ。とにかく、よろしくお願いします……」

震えながら座る島田さん。

さすがに眉間をぶち抜くってのはないと思うけど……第3者の立場から見ても怖いや。

「明久に香奈よ」

「あ、秀吉」

「さっきは災難でしたね、秀吉」

香奈の言う災難って、バカの魂のシャウトの事？

「いや、まああれ自体は慣れたものじゃったが……」

「？」

「な、なんでもないのじゃ！」

頭の上に「？」クエスチョンマークを浮かべる香奈と、顔を赤くする秀吉。
去年から思ってたけど、秀吉ってもしかして……

ガラ

その時、不意に教室のドアが開いた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

そこに立っているのは、本来このクラスには絶対にならないであろう少女。

「ちょうどよかったです。今自己紹介してるところなので、姫路さんもお願いします」

「あ、はい！姫路瑞希です。よろしくお願いします……」

学年二位の才女、姫路瑞希さんだった。

第3問 (後書き)

明久の自己紹介は次回です！

第4問

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）に入る言葉を答えなさい。

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

吉井香奈の答え

『私と瑞希ちゃんの……ポッ?』

教師のコメント

待ってください。貴女と姫路さんの何なんですか。

明久SIDE

突然現れた彼女に、Fクラスの面々は一瞬フリーズする。

「あ、あの、姫路瑞希です。よろしくお願いします……」

消え入りそうな声で自己紹介する瑞希ちゃん。

あ。香奈がおかしくならないように見張つとかないと……あれ？

「雄二、香奈は？」

「香奈なら姫路のところだ」

「……………leary?」

……暴動が起こるね。これは。間違いなく。

って香奈早っ！？もう瑞希ちゃんとこいるし！？

「うゝむ、久しぶりのこの感触うゝ……（むんずつ）」

「ひゃあ！？か、香奈ちゃん！？何してるんですか！？というかどこ触ってるんですか！？」

「え？胸だけど？」

「堂々と答えないでください！」

うー、羨まげフンゲフンさすがに香奈でもちよつとやりすぎかな？
ちよつと止めてこなきゃ……

「香奈、ちよつとストップ」

「え？何ですかアキ兄？現在進行形で瑞希ちゃん成分摂取中なんですけど」

「あ、明久君！助けてください！」

「う、うん。分かってるよ、瑞希ちゃん」

とりあえず瑞希ちゃんから香奈を引き剥がす。
ちよつとふくれっ面になってたけどまあスルーで。

「あの、質問なんですけど！」

「ひゃ、ひゃいつ！？」

いきなりクラスの……誰だっけ彼？とにかくクラスの誰かが質問する。

「どうしてここにいますか？」

……それは失礼じゃないかな？

「その、高熱で振り分け試験を途中退席してしまいました……」

『そつえばオレも熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に会ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の嘘をありがとう』

うん。バカばかりだね。

「よっ、よろしく願います!」

勢いよく頭を下げてトコトコ歩いていく瑞希ちゃん。

先生に注意される前に僕と香奈も元の席に戻る。

「ふ、ふう……、緊張しましたあ……」

「じゃあ、その緊張を私がほどいて……」

「わ、私、緊張とか全然しないんですよ!」

ダメだ。香奈という瑞希ちゃんはなんかおかしくなってる気がする。ちなみに約一名血の海に沈んでいる男がいるが、バカテストファンの皆様なら分かるだろう。

「なんじゃ、姫路はFクラスなのかの?」

「はい。えっと、……あれ?優子ちゃん?」

「む?姫路よ、ワシを姉上と勘違いしておらぬかの?一応ワシは男なのじゃが」

嘘をつくんじゃない秀吉!

「明久よ、別にワシは嘘をついてるわけではないのじゃが……」
「嘘だ!」

「そこでひぐらしネタに走らんでもよかるうに!」

とまあ冗談は置いて、

「瑞希ちゃん、本当に身体大丈夫?」

「あ、はい。もう大丈夫ですから……ひゃあ!？」

ぬつと僕の後ろから赤ゴリラ登場。

「本当に大丈夫か？ただでさえこの教室は衛生環境が悪いからな。気をつけないとゴぶるあ！何しやがる明久！」

「黙れ雄二！お前のせいで瑞希ちゃんがびっくりしたじゃないか！」

「姫路が驚いたのはお前のそのあり得ない次元の不細工顔にだ!!」

「なんだとゴリラ！」

「やんのかバカ！」

取っ組み合いを始める僕と雄二。
ちようどいい！今ここでぶち殺す！

「はいはい。とりあえずアキ兄もゴリラ野郎も落ち着きましょうか？」

「お、おう。そうだな……って香奈お前今さり気に俺を罵倒しただろ!？」

「それが？」

「……何でもないです」

ハハハ、ひざまずいてやんの、あはは！（絶賛キャラ崩壊中）

「アキ兄、ゴリラを雄二呼ばわりするのはよくないですよ？」

「そうだね。ゴリラに失礼だもんね」

「お前ら表出やがれええええ!!」

うーん、うるさい雄二だ。

「あ、あの、えっと、こちらの方は……」

「ん？ああ、すまない。主にバカのせいで自己紹介が遅れた。クラ
ス代表の坂本雄二だ。好きなように呼んでくれ」

「はい。よろしく願いますね、坂本君」

「雄二、近藤君をバカ扱いするのはよくないよ？」

（近藤）「お前だよ吉井」

そんなバカな。

「吉井君、次の自己紹介、君の番ですよ」

「あ、はい」

と呼ばれたのでとりあえず立つ。

「えっと、吉井明久です。よろしく願い——」

ガッ（雄二の足払い）

ゴン（僕がちゃぶ台の上に倒れこむ音）

バキィッ（ちゃぶ台が真つ二つになる音）

「いだあぁっ！？雄二貴様今ここで殺す！」

「上等だバカ久！かかってこいやぁ！！」

さっきから許せない！今度こそ（香奈に止められる前に）ぶち殺す！

「はいはい。二人とも落ち着いてください」

パンパンと教卓をたたきながら先生が注意してくる。
注意程度で止まるわけが――

バキィ バラバラ サラサラサラ……

……止まらざるを得なかった。
だってねえ……

「……替えの教卓とちゃぶ台を持ってきます。みなさんは自習して
てください」

先生はとぼとぼと教室を出ていく。

「……雄二」

「なんだ」

「やりすぎた、かもね……」

「……そうだな……」

第5問（前書き）

いいですともさん感想ありがとうございました！

第5問

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 H6C6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

吉井香奈の答え

『瑞希ちゃんとH?を6回、C?なことを6回』

教師のコメント

Cなことって？

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B
|E
|N
|Z
|E
|N
』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

香奈SIDE

先生が出て行くと、アキ兄が雄二に話しかけてます。

「雄二、ちよつといい？」

「あ？どうした？」

「ここじゃ話しづらいからちよつと」

どうやら廊下で秘密の相談をするようです。
やっぱ例のアレでしょうか？

「香奈よ、明久たちは一体どうしたのじゃ？」

「さあ？私は何も知りませんよ？」

「英語で」

「I know」

「……………」

ち、違いますよ！？知ってるだけで、別にどうこうしよってわけでは……

「で、でも、きっともうすぐわかりますから！」

「本当かの？」

「本当です！」

「ということはやっぱり香奈は知っておるのじゃな？」

……秀吉鋭すぎですorz

「まあ香奈がそういうならここは大人しく引き下がるのじゃ。それよりお主、身体は大丈夫なのかの」

「はい、別に体調不良で振り分け試験を休んだわけじゃないですから」

単純にあの監督の先生が嫌だっただけです。

「なら良かったのじゃ。この教室はまさにハイオクじゃからの」

「秀吉、ガソリンじゃなくて廃墟って意味の廃屋ですから」

秀吉は比較的常識人だと思ってたのに、違うんですね……

「あ、あの、香奈ちゃん」

と、後ろから瑞希ちゃんに話しかけられます。

「え？何かな瑞希ちゃん。あ肩が凝ったから胸をもんでほしいとかそれとも一緒にお風呂に入りたいとかそれなら最近近くに温泉見つけたから一緒に行ってみない女湯ならアキ兄に邪魔されることなく瑞希ちゃんの肢体を……」

「全然違いますっ！」

「肩が凝ったから胸を揉むというのはおかしい気がするぞい……」

え？何が？

「そっじゃなくて、あの、明久君にお礼を……」

「……ま、まさか、アキ兄に瑞希ちゃんの×××を！？だったら

その前に、アキ兄で本番になる前に私で練習して！」

「ひゃわわ！？な、なに言ってるんですか！？」

「香奈よ、動揺しておかしなことを口走ってるぞい……」

どどどど動揺なんてしてないですよ！？

みみみみ瑞希ちゃんのああああアキ兄に対する気持ちは知ってますから！

「思いつきり動揺しておるのじゃ……」

「そ、そうじゃなくてですね、振り分け試験の時のお礼を……」

「あ、そっちですか」

一応これでも常識はわきまえてますよ！？

……一応。

「振り分け試験の時に、明久君に迷惑をかけてしまいましたし、あのあと先生に私もう一度振り分け試験を受けられるように頼みこんでたのも知ってますから。そのお礼がしたいなって……」

「なるほど、そういう訳じゃったのか。明久もやるのう」

「アキ兄、すつごく必死でしたしね」

熱で保健室に行くだけなのに、たったそれだけでFクラス入りはおかしいって学園長にずつと抗議してましたから。

最終的には学園長室ごと壊しかねないほどになりましたけど……

「じゃあじゃあ、瑞希ちゃんの想いをアキ兄に伝えちゃうってのはどうですか？」

「ふえ！？」

「それは良い考えかもしれんのう。明久もきつと喜ぶのじゃ」

「き、木下君まで何を言ってるんですか！？明久君に嫌われちゃっ

たらどうするんですか!？」

緊急会議！

（秀吉、もしかして瑞希ちゃん、気づいてなかったりします?）

（反応から見ると、その可能性が強い。う。明久もそうじゃったが、姫路も相当鈍感じゃな）

（どうしよう、この場合）

（こういうことには他人はあんまり深くかわらない方がいいと思うのじゃ。しばらくは様子見と言ったところかの）

緊急会議終了！

「多分嫌われるってのはないと思いますけど……」

「うむ、姫路の様な可憐な少女に想いを伝えられて、嬉しくない者などいないじゃろう」

さらっとこっぴड़ずかしいと言いますね秀吉。

まあ私も同感ですけど。

「でも、でも……」

「でも、それは瑞希ちゃんが決めることです。少なくとも、私と秀吉は瑞希ちゃんの応援をしていますよ」

「うむ、同じFクラスの仲間じゃからな。友として、出来る限りのことはさせてもらおう」

「あ、ありがとうございます!」

それに、私は瑞希ちゃんが一番幸せだと思っことをしてあげたいですから。

あ、アキ兄と雄二が戻ってきましたね。例のアレの段取りでもして

たんでしょう。

いよいよですね、アキ兄

「（私も、協力しますよ）」

「む？どうかしたのかの？」

「いえいえ、なんでも」

アキ兄も素直になればいいんですけどね。

きっと雄二に本心を見透かされて焦っていたりとかしてましたよ。あの表情。

「……ところで香奈よ」

「はい？何でしょう？」

「ワシも、お主に話があるのじゃが……」

第5問（後書き）

秀吉の話とは？

まあそれはもっと先のお話♪

では次回もよろしくお願いします！

第6問

明久SIDE

先生が教室を出て行つてすぐに雄二に声をかける。

「雄二、ちょっといい？」

「あ？どうした？」

「ここじゃ話しづらいからちょっと」

雄二を連れて廊下まで出る。

なんか香奈が見てる……そういえば香奈は知ってたんだっけ。

「で、何だ？」

「うん、Aクラスの教室は見た？」

「ああ、凄い教室だったな」

雄二も見ていたようだ。

そして僕らの目の前のFクラスをみる……

「……………今更だけど酷いよね」

「この教室か、まあしょうがないかな」

雄二は割り切ってるみたいだ。

となると、コイツを動かすのは難しいかなあ……

「そこで僕から提案なんだけど、せつかく2年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「試召戦争だと？」

この文月学園は『試験召喚システム』という特別なシステムを導入している試験校だ。

試験召喚システムとは生徒が最も最近に受けたテストの点数に応じた強さをもつ召喚獣を召喚できるシステムのこと。その召喚獣を戦わせるのが試験召喚戦争、略して試召戦争。

「目的はなんだ？」

「そりゃあ勿論——」

「嘘をつくな」

「まだ何も言っていないけど!？」

確かにデタラメ言うつもりだったけどさあ!？
聞いてからでもいいんじゃない!？

「大人しく本当のことを話せ。まあどうせ姫路と香奈の為だろうけどな」

「分かってるんなら聞かないでよ……」

これだから僕の悪友は意地が悪い。

「まあいい。俺もやろうと思ってたからな」

「え？」

「どうせ目標はAクラスだろ？やってやろうじゃねえか」

なんか雄二もやる気みたいだ。それならそれでいいんだけど……

「何をたくらんでいる……!？」

「安心しろ。別にお前をどうこうしようってわけじゃないから……」

何か企んでいるような雄二に対して思わず身構えてしまう。

「そ、それならいいけど。でもさ、僕が言うのもなんだけど、勝てるのかな？」

「勝てるさ。こっちには姫路にムツツリー二、そして香奈と俺がいるんだぞ？」

「……そうだね、雄二と香奈なら、ね」

うん、なんだか行ける気がしてきた！

「やるぞ明久！」

「オーケー雄二！」

お互いの拳に拳をぶつけて同時に言う。

「『打倒Aクラスだ！』」

第7問（前書き）

どうもです。やっと宣戦布告のシーンまで来た…。
ここまでが長く、ここからも長い……まあ気長にやってくの
でよろしくです。

あと今回は初の雄二サイドですね。

第7問

雄二SIDE

「坂本君、最後の自己紹介は君です。よろしくお願いします」
「了解」

先生が替えの（それでも十二分にぼろぼろだったが）教卓を持ってきてから自己紹介が再開され、オレの番まで回ってきた。
普通は名字のアイウエオ順とかだと思っんだがその辺はやはりFクラスだからだろうな。
管理すらまともにされてねえ。

「あー、クラス代表の坂本だ。坂本でも代表でも好きなように呼んでくれ」

とりあえず教卓に上がって軽い自己紹介から始める。
呼び方なんて別にたいして変わらない――

「あ、じゃあ僕『ゴリラ』で」
「私『ゴリ丸ゴリ蔵』で」
「お前らは黙ってる！」

バカ兄妹は別としてな。

「まあ、変な呼び方は別にして、呼び方は好きにしてくれ。早速だがクラス代表として提案がある」

今まで軽くだらけてたやつらの意識がこっちに向き始める。
俺も人のこと言えた義理じゃないが結構腹立つな……！！

「皆、自分の周りを見回してみてくれ」

周りも何も、あるものと言えば――

1、腐った畳

2、脚の折れたちゃぶ台

3、蜘蛛の巣の張った天井

「Aクラスはリクライニングシートに冷蔵庫、ノートパソコンに個人エアコンらしいが――」

少しの間をおいて、

「不満はないか？」

静かに告げる

「大ありじゃあツツツツ……！！」

2年Fクラス、魂のシャウト。

「そうだろう。俺もクラス代表として、この差には問題意識を抱えている」

『まったくだ。いくら学費が安いからってこれはひどい』

『Aクラスも同じ学費だろ！？改善を要求する！』
『姫路さんと結婚したい』

「ああ、みんなの言い分はわかる。俺も同じ気持ちだ。それから最後の奴は香奈に殺される前に土下座しとけ」

香奈があのカプセルを取り出そうとしていたの気のせいだと信じた
い。

「そこで俺から提案だ。俺達Fクラスは――Aクラスに、試験召喚戦争を仕掛ける」

ゴクリ、と全員が息をのむ。と…

『勝てるわけない』

『これ以上設備が悪くなるのは嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらなげやあああ！吉井さんごめんなさい
！！』

だろうな…。最後の奴とか特に。

文月学園のテストには上限がない。

指定された時間の中で、己の力を最大限発揮することができるわけだ。そこにはどの問題を解くかという選択力も含まれてくる。

Aクラスの、特に上位十人はどの教科でも300点を超えるような強者ばかり。

それに対してFクラスは平均点数60点、まったく歯が立たないような、倒すなんて夢のまた夢のような存在、それがAクラスだ。

「まあ皆落ち着け。根拠はある。このクラスには、Aクラスを倒す

ための要素がすべてそろっているからな」

『『『え?』』』

全員が一斉にこっちに振り向く。

今まであまり目立たなかった分、まだ知られてないんだろうな。

「それを今から紹介してやる。おい康太、姫路と香奈のスカート覗いてないで、さっさとこっちにこい」

全く、香奈の目の前でよくやるよな、あの命知らず。

第8問

雄二SIDE

「それを今から紹介してやる。おい康太、姫路と香奈のスカート覗いてないで、さっさとこっちにこい」

畳に顔をこすりつけ、必死になっていた康太を呼びつける。
香奈の前で姫路のスカート覗くとか勇者だなアイツ。

「コイツは土屋康太。コイツの本名は知らない奴が多いかもしれないが、こついえば分かるだろう。コイツがあムツリの有名な寡黙なる性識者だ」

『『なにいつつ！？』『』』

さっきも思ってたがこのクラス仲いいよな。

「……………！？（ブンブンブン）」
「否定するなよムツリーニ。もう遅いぞ」

必死になって首を振って否定するが顔に着いた畳の跡が動かぬ証拠だ。

『あいつがあの有名な……………』
『本当にそうなのか……………？』
『だが見る。あからさまな証拠をまだ隠そうとしているぞ』
『ああ、奴こそムツリの名に恥じないスケベだ』

「……………！？（ブンブンブン）」

おい、首千切れるんじゃないかコイツ？

そんな中、一人首をかしげる姫路。あいつ、純粹なんだな……。

「姫路のことは言うまでもないだろう。その実力は皆もよく知っているはずだ」

「ふえ？わ、私ですか？」

『そうだ、俺たちには彼女がいた』

『彼女がいれば百人力だな』

『姫路さんけっくあwせdrftgyふじこーp』

「ガンホーガンホー……」

最後の奴は香奈か？

ま、まあいい…

「当然、俺も全力を尽くす」

それでも昔は神童と呼ばれていたんだ。

今でもその力は衰えていないということを証明してやる。

『坂本って昔神童って呼ばれてたんだろ？』

『てことは姫路さんと同じく振り分け試験は体調不良だったのか？』

『実力はAクラスレベルが二人もいるのか！』

「木下秀吉だっている」

「む、ワシかの？」

『木下秀吉だと?』

『あの演劇部のホープの……』

『Aクラスに双子の姉がいるっていう……』

『世界最強の美少女!!』

「ワシは男じゃぞ!？」

さすがにその顔でその台詞は説得力ないと思うぞ……

「だがな、こんなのは序の口だ。俺たちには……吉井兄妹がついて
いる」

この二人こそが、Fクラスの真の切り札だ!
だがそんな俺の考えに反し、
ワイルドカード

『……え?』

クラスの連中は素っ頓狂な声を上げる。

第9問

香奈SIDE

「……雄二、アキ兄を才チ扱いにするつもりなら容赦しませんよ？」
「違う！俺は本当にお前ら兄妹を評価しているんだ！」

ま、ここはそういうことにしておきましょう。

「香奈よ。今の台詞は明久を才チとしか見てないということなのじやろうか？」

あれ？

「うう…香奈にまでそういう扱いになった…」

あれれ？

「香奈ちゃん、明久君のこと好きだと思ってたんですけど……」

あれれれ？

「ま、香奈だしな」

「歯を食いしばりなさい雄二」

「なぜ俺だけリアクションが違う！？」

だって全ての元凶ですし。

黙りなさい元凶とだけ言っておきます。

「と、とにかく、この二人は本当に（試験召喚戦争においてだけ）
凄い」

「聞こえてますよ雄二」

「その他の面でも色々すごい」

自分で言うのもなんですけど、雄二って私の何が怖いんでしょうね？
気迫？

『吉井さんはいいけど兄の方はどうでもいい』

『吉井さんは文系が教師クラスだけど兄の方はただのバカだろ』

『吉井さん結婚してください！』

「全員死んでもらえますか？」

アキ兄をバカにする人とお付き合いなんて太陽がブラックホールに
なってもゴメンですね。

「そうか。お前らは知らないんだな。なら教えてやる。兄貴の方」

——吉井明久はな」

雄二がアキ兄を指さしながら、間を置いて言います。

「——観察処分者だ」

一瞬静寂が訪れ、

「それってバカの代名詞じゃなかったか？」

誰かが禁句を…

「違うよっ！ちょっとお茶目な16歳につけられる称号で「そうだ。バカの代名詞だ」肯定するなバカ雄二！」

「さすがにこればかりはフォローのしようがありませんから……」
「香奈まで!？」

アキ兄が観察処分者なのも、観察処分者がバカの代名詞であることもすべて真実ですから、ちょっとフォローしづらいですね。それでも言った人は天国に召されてもらいますけど。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「まあ教師の雑用係だ。物理干渉が可能になった特別仕様の召喚獣で、教師の雑用を手伝わされるってことだ」

「それってすごいんですね！」

ああ…^{天然}純粹すぎる瑞希ちゃんが不安……

「そ、そんなことないよ。他の人と一緒に、教師の承認下でないと呼び出せないし、」

「フィードバックで召喚獣が受けた痛みが返ってくるしの」

「………不便極まりない」

「居ても居なくても変わらない雑魚よ」

「みんなしどい!!」

秀吉も康太も美波もたたきすぎです。

ちよーっとお仕置きが……？

「そして妹の方…吉井香奈もまた特別だが……それはまた今度教えてやる」

あ。情報の流出を防ごうとしているものが一人。

「とにかく、手始めにDクラスを落とす！宣戦布告の死者だが、あきり……」

「（ニコッ）」

「……ではなく、須川に頼もうと思う」

よかった！想いが通じた！（超棒読み）

「なんで俺が……」

「頼む。逝ってくれ」

「字違うぞ」

やっぱ雄二だけじゃ決定力にかけますね……
ここは……

「あの……須川さん」

「ん？なんですか吉井さん」

「私……クラスの仲間の為に一生懸命になれる人、好きですよ？」

「任せる坂本！俺が逝こう！」

『いや、オレが！』

『むしろ俺が！』

『わしに行かせてほしいのじゃ！！』

ちよろいですねーって秀吉？何で混ざってるんですか……

「と、とにかく、須川、逝ってきてくれ」

「もう字の違いなんて気にならないぜ！」

駆け出していく須川君。

あれ？秀吉がなんか落ち込んでますね？

「どうしたんですか秀吉？」

「何でもないのじゃ……」

「????」

ホントにどうしたんでしょう？

「香奈……それはひどいよ」

「香奈ちゃん……」

「さすがは吉井の妹ね……」

「……鈍感」

「鬼かお前は……あ、鬼か」

よく分かりませんがとりあえず雄二は黙りましょうね？

第9問（後書き）

次回Dクラス戦。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6361y/>

バカと百合な妹と召喚獣

2011年12月15日23時48分発行